



まちにふれる。 三の丸の縁側

名古屋城三の丸地区は、みなさんにひらかれ、多様な人が関わりたくなるまちをめざしています。そんな三の丸の周辺で活動する方をゲストに、参加者同士で気軽に交流しながらこれからのまちのヒントを一緒に見つけていくのが、「まちにふれる。三の丸の縁側」です。

第1回は、「まちに関わるってどういうこと？」をテーマに開催しました。

話題提供

『まちへの関わり方と共創まちづくり』

ゲストスピーカー

株式会社FabCafe Nagoya 代表取締役 矢橋 友宏 さん

FabCafeとは？

矢橋さんは、三の丸のご近所、Hisaya-odori ParkでFabCafeを運営されています。

FabCafeを『膜』と表現した矢橋さん。本から“異質が接する界面が価値を生み出す”という考え方を引用し、異なる立場や考えを持つ人が、ただ同じ場所にいるだけではなく、適度な距離感で交わり、お互いに刺激を与え合う中で、新しい価値が生まれるような〈界面の設計〉の重要性をご紹介いただきました。まさに、FabCafeは人と人、人と地域をつなぐ膜の役割を担いたいと考えているそうです。

what do you fab?

FabCafeのスローガン「what do you fab?」。

「ここで何をしてくれるのか」ではなく、「あなたは何をしたいのか」と問いかけることで、一人ひとりが自分の意思で行動するきっかけを生み出しています。



FabCafeで主体性に目覚めた人が、それぞれの職場や地域に戻り、新しい挑戦を始める。そんな変化が少しずつ広がることを目指しているそうです。たとえば、「珈琲博覧日」や「Aichi Future Fes」など、地域の人々や企業、学生、クリエイターなど、多様な主体をつなぎながら、新しい挑戦が生まれる土壌づくりを進めていることをお話しいただきました。

問いをすぐ答えにしない

講演後半では、現代社会に対する問題提起もありました。

これまで社会は、科学や技術の発展によって多くの課題を解決してきました。数値化し、分析し、効率化することで豊かさを実現してきたのです。

しかし、その成功体験が行き過ぎると、本来手段であった数字や指標が目的になってしまう危険があります。売上や利益、偏差値や人口など、測りやすいものばかりを追いかけることで、「そもそも何のためにやっているのか」を見失うことがあると矢橋さんは指摘します。

人口減少や地域コミュニティ、防災、環境問題など、現代の課題は複雑に絡み合っており、単純な正解はありません。だからこそ、「すぐに答えを出そうとするのではなく、問いを持ち続けること」が大切だと語りました。

また、〈余白〉がキーワードとして示されました。余白を「何もない場所」ではなく、「まだ意味が決まっていない場所」と捉えていくことで、自分だったらどうするか、主体性が育まれていくのではないかとお話しいただきました。

一人ひとりがまちの担い手に

締めくくりに、まちづくりとは施設をつくることではなく、人を育てること、という視点でお話しいただきました。行政や企業が用意した場を市民が利用するだけでなく、市民自身が地域の担い手となり、主体的に関わることが重要です。

共創まちづくりは、

「余白を残し、遊びやエンターテインメントを持ち込む」

「主役を逆転させる」

「主体的に感じ、解釈し、思考し、行動できる個を育む」

こういったことを、まち全体で展開できると良いのではないかとお話しいただきました。



クロストークではゲストスピーカーの矢橋さんとコーディネーターの井澤さんにより三の丸の話題へ。

無目的に行きたくなる場所をどうつくるか

三の丸は、法務局や市役所など「目的を持って行く場所」というイメージがあります。だからこそ、これからの三の丸を考えるうえでは、〈目的がなくても行ってみたいくなる場所〉をどうつくるかが、一つのテーマになるのではないかと—そんな議論が交わされました。

三の丸には、広い道路や緑、建物のセットバックによって生まれた空間があります。平日は多くの人が働いていますが、休日になると人の姿が少なくなる場所もあります。その「使われていない時間」と「余白」を、まちの可能性として捉え直せないか。

三の丸を〈実験場〉に

矢橋さんからは、**三の丸を大きな社会実験のエリアとして捉えるアイデア**も紹介されました。

たとえば、フリーマーケット、大道芸、芸術祭、野外トーク、モビリティやロボットの実験など。最初から大きな施設をつくるのではなく、まずは1日、2日と小さく試してみる。

「どれくらい人が来るのか」「どんな人が参加するのか」

「何が面白がられるのか」を実際に確かめ、反応がよければ次につなげていく。こうした小さな実験の積み重ねから、まちの新しい使い方を見つけていくという考え方です。



「消費するまち」から「つくるまち」へ

これまでのまちは、どちらかといえば「何を買うか」「どこで消費するか」という視点から考えられることが多くありました。

これからは、「自分たちで何をつくるか」「どう使い、どう循環させるか」という視点も重要になってきます。たとえば、壊れたものを修理する「リペアカフェ」のような活動。専門的な技術を持つ人だけでなく、「自分もやってみたい」という人が参加できる場があれば、ものを直すことをきっかけに、人と人とのつながりも生まれます。まちづくりも同じです。

行政や誰かが完成したものを用意して、市民が「使う」だけではなく、市民自身が「やってみる」「つくってみる」。その繰り返しが、まちの新しい文化になっていくのかもしれない。

「参加する人」が「つくる人」になる

FabCafeで起きていることとして、矢橋さんが紹介したのが、「**主役の逆転**」です。イベントを見に来た人が、別の人の活動に刺激を受け、「自分もやってみようかな」と思う。そして、今度は自分がイベントを企画する側になる。そうやって、「参加する人」と「つくる人」の境界が少しずつなくなっていく。これは、まちづくりにもつながる考え方です。まちの中に、自分の興味や好奇心を試せる場所があれば、一人ひとりがまちの「当事者」になっていく可能性があります。矢橋さんが話した「**創造性や好奇心は、特別な才能を持つ人だけのものではなく、誰もが持っている**」という考え方も、今回の大切なメッセージの一つでした。

第1回の三の丸の縁側では、三の丸を人が関わり、試し、出会い、新しい活動を生み出す場所として捉えるという視点が浮かび上がりました。クロストークでは、参加者の方から、戦災復興の都市計画を踏まえたこれからのまちづくりの方法や子供が将来語りたくようなアイデアなど、たくさんの示唆をいただきました。

広い道路。緑のある空間。官庁街としての歴史。平日と休日の異なる表情。三の丸には、すでにたくさんの「余白」があります。

その余白をどう使うかは、まだ決まっていません。

だからこそ、「**自分だったら、ここで何をしてみたい？**」と考えることができます。

三の丸の縁側は、そんな一人ひとりのアイデアや好奇心が出会い、まちの次の一步を考えるための場です。



次回は11/8（日）午後、まち歩きを予定しています。ぜひ、これからの三の丸と一緒に考えていきましょう。